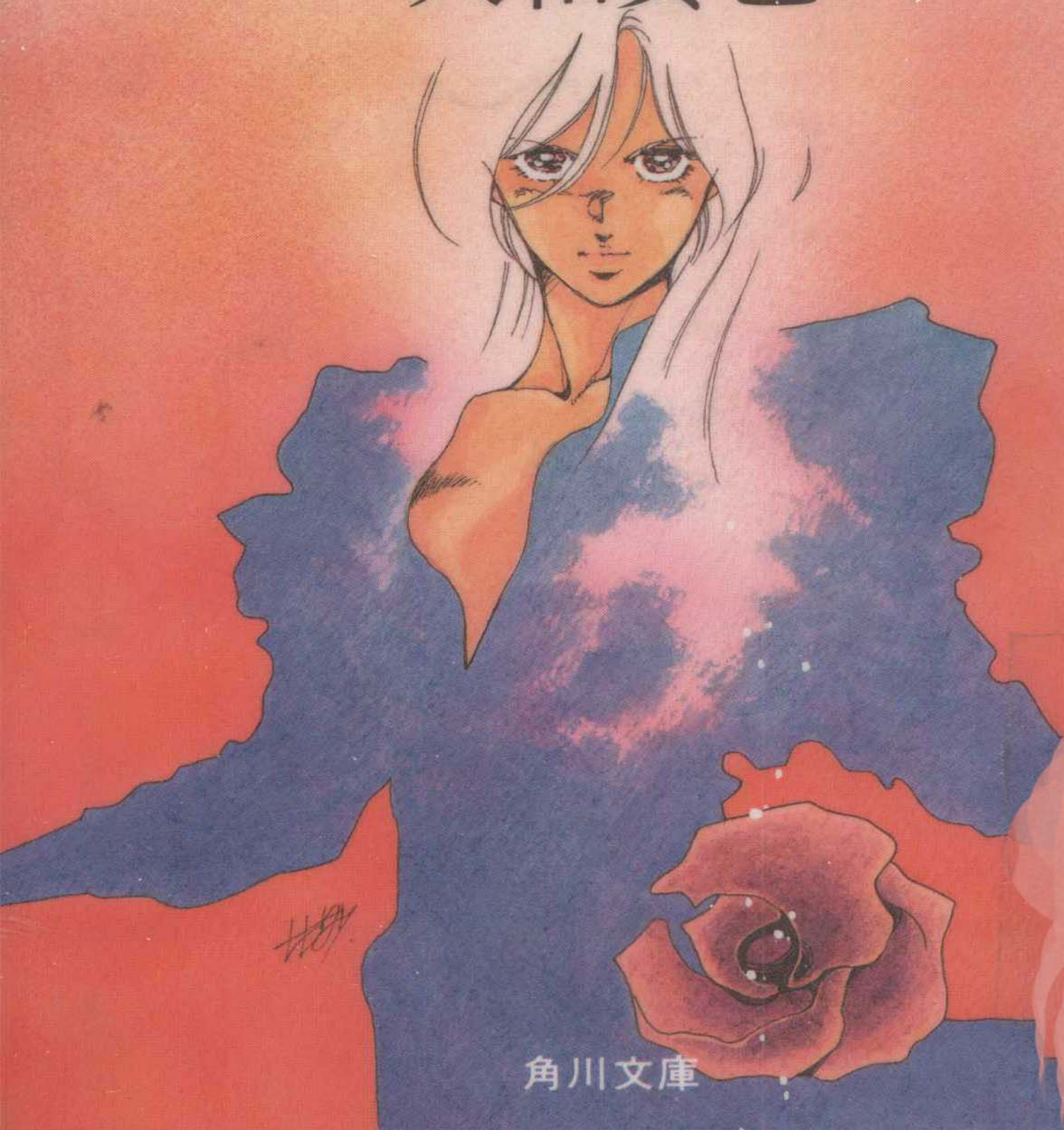


花が散る春

みかん
蜜柑山奇譚

大和真也



角川文庫

はな　ち　はる
花が散る春

やまと　ま　や
大和真也



角川文庫 7242

昭和六十三年九月一日 初版発行
昭和六十三年九月十日 再版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)八一七―八四五―

営業部(〇三)八一七―八五二―

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

花が散る春

みかんやま
蜜柑山奇譚

大和真也

□ 絵・本文イラスト たがみよしひさ

NOTE

宮根転布子
みやね ちようこ

紙野市の南東部——市制三十年の年に新たに三町村を吸収合併したために、厳密には旧紙野市の南東部というべきなのだが——こっぴりと盛り上がっている丘陵地区は、いつの頃からか、蜜柑山と呼ばれている。蜜柑畑があるわけではなく、しいて由来を問うならば、その地形が蜜柑を連想させたからなのであろうが、そこは、かなり昔から庶民には立ち入ることの出来ない土地であった。旧華族の別邸が建てられていたのである。憲法改正により華族制度が廃止された今でも、蜜柑山は聖域とされていた。宅地造成が進み、わらわらと郡部に蜂の巣住宅が建てられても、この地にだけは誰も手をつけようとしなかった。幹線が脇を走り、徒歩十五分のところに地下鉄の駅が出来ているにもかかわらず、蜜柑山は昔と変わらぬうっそうとした木々に覆われているのである。

香流コンツェルンの力であった。

蜜柑山一帯の土地は、香流コンツェルンの手を経て、旧華族宮根家の所有となっていた。宮根家四十五代当主、宮根転布子は実は、香流コンツェルン総帥聡二郎の庶子である。宮根家と

の結びつきは、聡二朗の祖父源五郎げんごろうの代からの悲願であった。宮根家には転布子の母の上に二人の兄がいたが、どちらも夭折ようせつしている。転布子の母は正妻として香流に居ついたが、娘は宮根家の強い要望で庶子と届け出され、祖父母のもと、宮根家の跡とりとして育てられた。

転布子ちんぷしが十八歳の冬、祖父母はあいついでみまかり、以来、転布子は蜜柑山の別邸べつていに居まよを構えている。香流側としては、彼女を一人で住まわせるのには反対した。転布子は譲歩じやうほし、お目付役めつけやくを一人、同居させることに同意した。そのお目付役が隼石霖しずくいしりんである。

隼石霖と香流のつながりは、源五郎の代から発している。霖の祖父は、源五郎の恩師だった。早くに両親を失くした霖は、その利発さを源五郎にかわれ、ゆくゆくは聡二朗、そしてその子の補佐役ほさやくとなるべく援助を受けていた。転布子と同じ年の彼は、宮根邸へ移ってきた時期に、研究室への参加を認められている。早期入学——スキップ制度の第一期生だった。

学制を二本立にする、という試案は「有人宇宙飛行の実現」のお題目のもとで可決された。巧妙にひかれた二本のレールの上で、有人宇宙飛行用の技術者養成は、わずかずつながら進んでいた。香流かなれは、そのバックアップを全面的に行なっている。もともとそのお題目は、香流の持ち出してきたものだった。

異星人が存在する、という話題は、はるか昔からまことしやかに語り伝えられていた。きっぱりと否定されてしまったたこ型火星人から、高度な文明を持つ他星雲の生物まで、しかしな

がらそれらは、ほとんどが想像上のものでしかなかった。目の錯覚であつたり、強度の思い込みであつたり、確たる証拠もなく語られる宇宙人の話を、世間の大半は笑いながら聞き流していた。

故に、香流源五郎は宇宙人とコンタクトをとり始めてから三十年、そのことをひた隠しに隠していた。宇宙人の存在を白日のもとに明らかにしたのは、日本各地に有人宇宙飛行実現のお題目が定着してからである。源五郎は、火星開拓を考えていた——いや、正確には、宇宙人にそそのかされたと言つたほうがいいかもしれない。宇宙人がもたらした火星の情報は、東西大國がかつてじらしながら公表したものとはかなり異なつていた。充分に倉庫となりうる。西側陣営内における位置固めとして、この計画は積極的に取り上げられた。その裏には勿論、源五郎と宇宙人の、巧妙な世論操作があつたのだが。

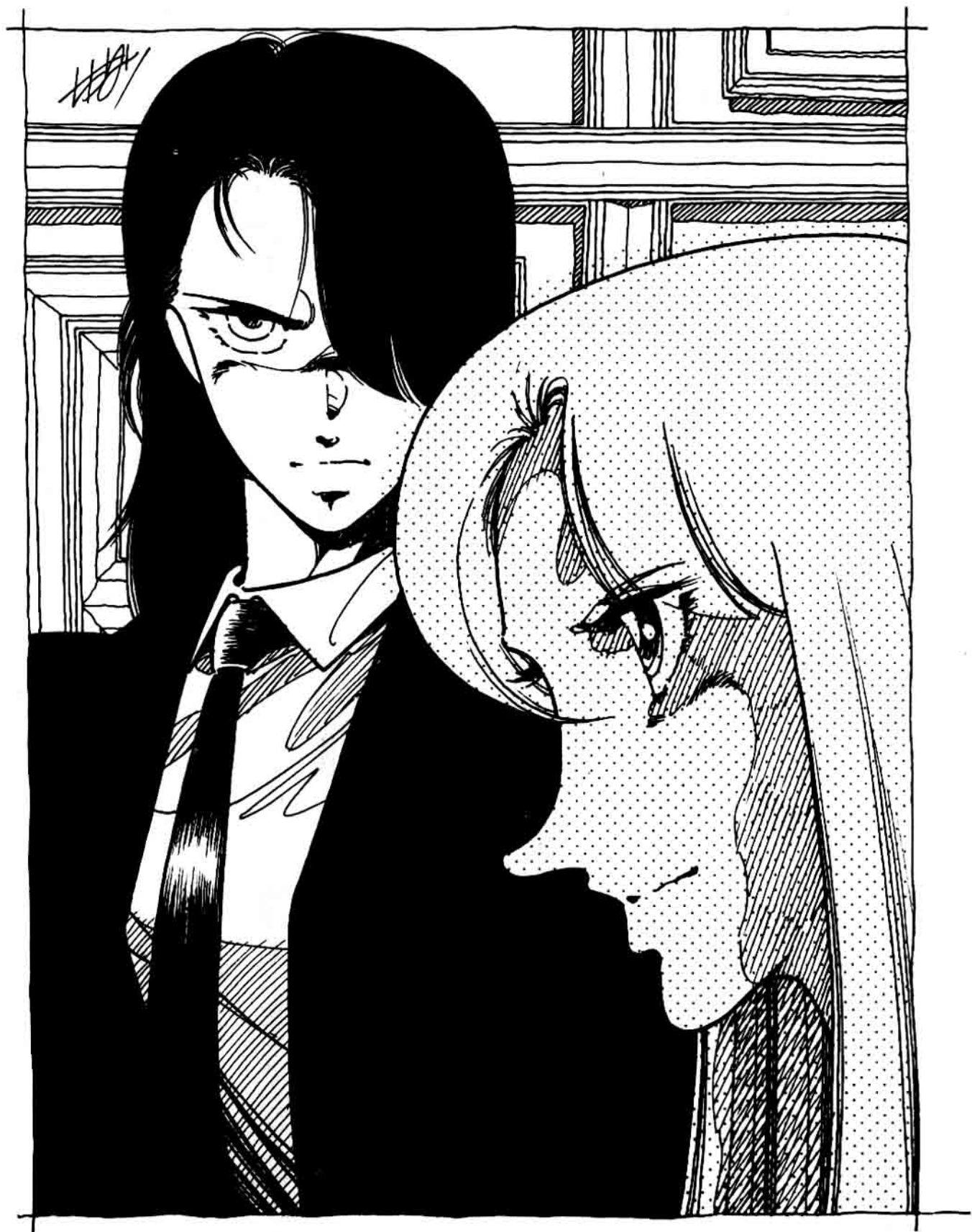
源五郎は、製薬会社社長の次男だつた。薬科を出て父親の会社に入り、新薬の開発にたずさわつていた。一介の製薬会社をコンツェルンにまで仕立てあげたのは、彼が切り札を手の内に持つていたからだ。宇宙人の助言をもとに、彼は、新薬を二つほど生み出して礎をきづいた。宇宙人が、どんな意図のもと、源五郎と接触したかは判っていない。ただ、少なくともこの時点では、良き助言者であり、情報源だつた。香流では宇宙人のことを、だから、「オブザーバー」と称している。

宇宙人の存在を公表した際の反応は、予想されたよりずっと小規模だった。その姿が、一部の者にしか見えない——宇宙人側が意図しているのかどうかは判らないが、コンタクト出来るのは何故か、源五郎の血縁に限られているようだった——という事実が、宇宙人とは便宜上の言いまわしで実は、人工知能かそれに近いものではないか、という噂を広めた。香流側としては、既にお題目が定着していることもあって、それ以上事実をはっきりさせようとはしなかった。

「オブザーバー」とのコンタクトは香流の血が必要であるらしい、という推測は、コンツェルンの指揮系統をくっきりと色づけた。娘婿では駄目である。血族が跡目を継ぐ。コンツェルンの存続を計るためには、逆に、優秀な血筋を身内に入れる必要性があった。聡二郎は、その考えを着実に実行した。

転布子には、異母弟妹が明らかにされているだけで四名いる。うち二名は男だ。それぞれ庶子ということで、香流の姓を名乗ってはいない。香流の嫡子として転布子の兄、綺三郎がいるため、不要な衝突を避けるべく、そうした処置がとられたのだ。

最初に言い出したのが転布子だったか、香流家だったかは明らかでない。転布子が宮根邸に移って三年経った春、彼女は下宿屋として宮根邸を提供することになった。同居人は庶子である竹越健一と、同じく葵良馬、そして、聡二郎の友人の娘である結崎麻由の三人である。三人



ともそれぞれ進学を果たし、丁度新居を捜しているところだった。宮根邸は一挙ににぎやかになった。

秋に、ちょっとした事件が起きた。

良馬が、いなくなったのだ。

庶子とはいえ、香流の血をひく者が集まっているのである。警備は——当主である転布子がいい顔をしなかったため、人目につかないよう、電子機器を駆使用するシステムになっているが——手薄ではなかった。夜間、二十二時から翌朝七時までには邸の出入りはモニターでチェックされる。出入りだけではない。誰が邸内のどこにいたか、ということも、実は三十分おきにチェックされていた。良馬はその三十分の間に、見事に姿を消したのである。

宮根邸の一階には、ちょっとした規模の図書室がしつらえてある。良馬は、二十三時十五分までそこにいたことが確認されていた。

朝食に顔を出さない彼を不審に思った転布子が、前夜の記録をひっぱり出してきて、そのことが判った。まるで神隠しである。

転布子には、心当たりがあった。

図書室の北西の角には、今はもう使っていない螺旋階段がある。書棚でふさいであるため存在は転布子しか知らない。その階段の下に、宮根家の娘だけが立ち入ることの出来る修行場が

あった。

宮根家は、日比津宮の齋宮家である。本来齋宮とは神との婚姻のみで一生を送るものであるが、古く咍姫の代に、夜伏神社の神官との婚姻を許され、齋宮でありながら一子をもうけたのが縁起であると伝えられている。夜伏神社はその際、日比津宮に合祀された。三十七代篤也の代に宮根家は粕野に移り、齋宮の任も解かれたが、以後もその娘は齋宮としての修行をとりおこなうことがしきたりとなっている。転布子も、祖母のもと、その行をこの別邸で行なっている。

あたらまいて、という行がある。三日三晩修行場に籠って食を断ち、外部との接触も断つ。そうすることによって、蜜柑山におわします神と語らうことが出来るようになる、と言われている。ただし、神と語ったことは口外してはならない。行の成否は、だから、当人以外判らないのだ。転布子は十二歳の時——初めて月のものをみたすぐ後で、その行にのぞんだ。

あの時、修行場の中に、ぽっかりと別の空間が口を開けた。と転布子は憶えている。好奇心からその中に入り込むと、その空間は地上では考えられない深さまで伸びていて、彼女の体はふわふわと、まるで空に浮かんでいるような感覚で落ちていった。底には重力というものがほとんどなく、いぶかしみながら漂っているうちに神が現われたのだ。初めて目にする神は、きらきらと眩しかった。そこが地球上に存在する地ではないことを、転布子は、何回めかの逢瀬

で教えられた。行を積んだから空間の口が開くのではなく、よく理解出来ない一定の法則に従ってその口が現われていることも。

何かの拍子で修行場に下りた良馬が、それを通して神のもとへ行ってしまったのかもしれない、と転布子は思った。丁度、空間の口が開いた時期とも合う。彼女は、次の開口期に下りてみよう、と思っていた。

が、その必要は、香流からの連絡で失せてしまった。定例のコンタクトをとった聡二郎が、宇宙人の元に良馬がいるのを見つけたのである。

良馬は、宮根邸の中で一番、香流の血が濃かった。それ故オブザーバーは試みに良馬を呼び寄せたのだろう、と聡二郎は判断した。良馬の母は、源五郎のいとこの孫であった。良馬は、次期後継者候補として聡二郎の手元におかれることとなった。

蜜柑山の神と宇宙人との関係は、転布子の知らないことであつた。彼女はオブザーバーとコンタクトをとったことはなく、それを確かめる手段も持たなかつた。神は何も告げようとはしなかつたし、転布子もまた、香流に神の存在を伝えることはなかつた。香流が宮根家との結びつきを求めたのは、実は、宮根家の神との結びつきに目をつけたからであるが、しかし、宮根側はそれを香流に渡すことを拒んでいたのである。

宮根邸に空部屋がもう一つ出来た。

NOTE

—— おおえ 大江 哲 あきら

宮根邸の敷地内には、ご多分に洩れず薔薇園があつた。びろうどの手触りの色濃い黒薔薇から、透きとおる磁器を思わせる白薔薇まで、赤い系統の花ばかりが植えられている。

黄薔薇も青薔薇も、転布子は好きではなかった。

「嫉妬、なんて花言葉もある、って一度知っちゃうとね、妙に気遅れがしちゃうのよ」

麻由が戯れに聞いたことに、転布子はそう答えて微笑んでみせた。「嫌ってるわけじゃないわ。花も木も、植物はみんな好きよ。ただちょっとだけ、優劣をつけてしまってるだけなの」

春咲き——一番に咲いた花を摘んで、その年用のポプリをつくるのは、すっかり習慣となっていた。ベビーバスに山のように摘んだ花を、ぱらぱらと花びらにほぐして、天日で干し上げる。宮根邸のサンルームは、この時期になるとちょっとだけ甘い薔薇の香で一杯になる。

哲——大江哲は、宮根邸で最初の春、このポプリ造りに出くわしたときに大層面喰った。大體からして、ポプリなどというものの存在を知らなかったし、その製造工程を脇で見ている分には、そう、まるで花のミイラを造っているとしたかと思えなかったのも事実だった。だから哲は、

最初の春、ポプリ造りには加わらなかった。

転布子^{ちんぷこ}しか知らないことではあったが——いや、もしかしたら霖^{りん}も気付いていたかもしれない——実は、このポプリには魔^まよけの意味があった。蜜柑山^{みかんやま}では薔薇^{ばら}が、一番有効だった——以前、日比津宮の近くに居を構えていた頃はくちなしを使用していたのだが。

植物には場を保持する作用が、どんなものにも多かれ少なかれある。転布子が造るポプリの、既に乾^すいてしまった花びらの一片一片に未^{いま}だ、保持しようとする意志がほんのりとともるように残っていることに哲^{あきら}が気付いたのは、もう夏も終わりのことだった。

およそ二か月の長い夏休み、宮根邸には滞在^{たいざい}客^{きやく}が一人あった。良馬が聡二朗のもとへ移ってから既に四年が過ぎている。健一も麻由もそれぞれ院に進み、一年半の米留学から呼び戻^{もど}された哲が加わり、そして、麻由の遠縁である石動水流^{いするぎみず}が入試準備のために滞在している——奇妙にぎやかな夏休みだった。

朝食以外は滅多^{めった}に食卓をともしない霖^{りん}がこの夏は三度もガーデンパーティーを主催した。新参者二人に——といっても、哲は秋にここへ来たのだから一年近く同居していたのだし、水流は休みが終わればとりあえず実家へ帰ることになっていたが——彼は、随分と積極的な興味を抱^{いだ}いていた。

大江哲は、実際奇妙な人物であった。

幼い時から、勘の鋭いところはあった。人の顔色を読むのがうまかった。予知能力というわけではなかったが、しかし、危険を察知することがある程度出来たし、物の寿命を悟るのも得意だった。

彼が自分の能力を客観的に知ることが出来たのは、二十歳の時である。大学のプレ・ゼミで高辻教授と出会ったことが、彼を米留学にまで導いた。

高辻教授は肩書き上は文学部の副部長、専攻は日本史であった。神道の研究家としても知られており、転布子とは古いなじみであった。が、もともとの出身は医学部、一家が医学者——父は大学教授、母が大学病院勤務、二人の兄もそれぞれ医学畑だったため、とりあえず大脳生理学を研究していた。日本史に転んだのには、宮根家の影響が強かったといわれているが、そのため彼の講義は少し風変わりだった。大脳生理学に端を発した超心理学の研究は、余技ではあったが、海外からは注目を集めていた。彼が副部長の地位についたのは、宮根家と、そして香流のバックアップがあったからだといわれている。香流は、オブザーバーとのコンタクトを通じて、高辻教授を高く評価していた。有人宇宙飛行に関して生じることが予想される機能障害について、現在は畑違いの彼のアドバイスが有益である、と、オブザーバーがのたまったのである。宮根転布子となじみであったことも幸いした。

哲が高辻教授のプレ・ゼミを選択したのは入学以来の友人である竹越健一の推めがあったか